

岐阜県 串原村

へボの巣コンテスト 2001

岐阜県串原村ではその昔から、へボ（地蜂＝学名クロスズメバチ）は肉や魚にかわる貴重なタンパク源として食されてきました。村の暮らしと切り離しては考えられないへボとの深い関わりは、例年秋に行われるへボ祭りへ訪れると知ることができます。

平成13年は11月3日に開催されたへボ祭り。近年、山林開発が進む中で全国的に減少するへボを守るべく、平成5年に発足したくしはらへボ愛好会の主催によるイベントです。

なかでも、サンホールくしはらを会場に行われる「全国へボの巣コンテスト」は、各地から愛好家が持ち寄るへボ（クロスズメバチ）の巣の重さを競うもので、その様は圧巻です。競い合う巣とは、飼い巣といって、6〜7月ころに山中で見つけた小さな巣を飼育箱に収容し、エサをあたえて秋までに大きく育てていくといった過程を経ていきます。



会場では、まず成虫を煙幕でいぶし、順次飼育箱から巣を取り出していきます。巣はビニール袋に入れて重さを計量します。気象との関係などによ

り、巣の重さは毎年のように変動はありますが、愛好家の手により丹念に育てられた巣は重さ3kgを超えるものも多



く見られます。今回は最大となると6kgを優に超えるものが出品されました。出品数は120点余にもおよび、遠くは山梨県からも参加されました。計量後の巣は、非売品を除き促売されることもあって、会場は熱気に包まれます。

イベント当日は雨が降っていたにもかかわらず、たくさんの人々が来ていました。会場には串原村に古くから伝わるへボ料理を販売するコーナーも設けられ、こちらも多くの人々が賑わいを見せます。たれにへボをすりこみ串に刺して焼いたへボ五平や、へボの炊き込みご飯であるへボ飯などは、例年を通じ人気があり、売り切れてしまうこともしばしばです。まさにへボを知り、へボに親しむことができる絶好の1日となります。

また、平成14年7月には待望の温泉入浴施設がオープン予定ですので、皆様、串原村を訪ねてみてはいかがでしょうか。

（問合せ先）

岐阜県恵那郡串原村2266番地の1  
串原村役場 産業建設課長 平林春美

0573・52・2111

素晴らしきミツバチの世界

養蜂とは、ハチミツの素晴らしさとは。永年蜂を愛し続けてきた久世佳弘氏が語る、素晴らしいミツバチの世界!!

六角形の巣の不思議

多くの単独性の蜂は、円筒形の巣を作って子育てをしますが、ミツバチの巣はコロニーの運営と同様に、実に整然としています。どのミツバチの場合も、巣は口ウでできて六角形の巣房（巣の小屋）の集合体です。

羽化後1週間ほど経った働きバチは、腹部の口ウ腺が発達してきて、うるこのような口ウを分泌するようになります。これを、口や肢、頭を器用に使用して六角形の巣の小屋を作っていくのです。この小屋で卵からかえった幼虫を育て、さなぎになると口ウでふたをします。同じ巣の小屋は、ハチミツや花粉を貯蔵するためにも使われます。巣は巣板の両面に小屋が作られ、裏と表が半分ずつ重なり、薄い口ウで仕切られていて軽いのですが、多量のハチミツを蓄えるほどしっかりと丈夫にできています。

なぜ巣は六角形なのでしょう。ほかの円筒形の巣の断面はやはり円で、この円を束ねると接したところが直線になって多角形ができています。同じ大きさの多角形で平面を埋めようとすると、三、四、六角形でなら隙間なく埋めることができます。しかも、中に入る幼虫は円筒形だから、三角形などではむだができやすいし、六角形以外の選択はなさそうです。同じ容積の部屋を同じ数だけ作るなら、六角形が最も材料が少なく、軽いこと、各辺に力が加わった場合、巣板全体に力を加えた場合、最も変形しにくいことなど、種々の好条件が生まれます。ミツバチも最初は円筒形の巣の集合で、やがて蜂口ウを使った巣作りは正確な六角形作りの過程から始まったと考えられています。この原理を利用した蜂の巣型の構造



株式会社札幌山本養蜂園社 久世佳弘  
住 所 札幌市白石区北郷2条7丁目6の13  
事業内容 ハチミツ関連商品 養蜂器具卸販売  
TEL 011-873-38838

札幌山本養蜂園